

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2023 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	教育機関同士の連携支援を通じた西ヌサトゥンガラ州・ロンボク島における健康教育の面的拡大
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 POMk Project
(3) 実施期間	2023 年 11 月～2024 年 10 月
(4) 実施国	インドネシア共和国
(5) 活動地域	西ヌサトゥンガラ州・中央ロンボク県プン市およびプジュット市
(6) 活動概要	①活動の背景： ロンボク島はインドネシアの中でも低所得・高乳幼児死亡率・震災の影響等、多くの健康問題を抱える。疾病予防や治療の判断には健康に関する知識が必要だが、当地の教員レベルは様々で、学校教育による知識の定着は不十分である。 私たちは福島県発の NPO 法人として、同じように震災の影響が残る当地に対して継続的に支援を行ってきた。JICA 基金案件としても、2019 年度「インドネシア：西ヌサトゥンガラ州中央ロンボク郡・ジョンガット地区教員に対する健康教育支援事業」および 2020 年度「インドネシア：大学－小中高等学校間の連携支援を通じた西ヌサトゥンガラ州・ロンボク島での健康教育の拡大」として健康に関する教育レベルの引き上げを図ってきた。前回までの活動において、YGMC 校では体験型学習会のノウハウはかなり蓄積されてきた。 ②活動の目標： YGMC 校（Yayasan Generasi Muslim Gendekia）および Eco school Nusantara 校において、健康教育活動実施に関わる学校教員の能力を向上させる。 YGMC 校では校内で健康教育活動をするだけでなく、地域コミュニティや周辺学校に対して活動実施の支援を行っており、同活動のハブとなってきた。本事業では、特に Eco school Nusantara および周辺での健康教育活動や『健康教育コンテスト』を実施することで、これらに関わる教員の「健康教育活動実施能力」「健康教育活動を地域に伝える能力」を育成する。健康教育活動のハブとなる拠点を増やすことで、将来の活動の面的展開を企図している。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容:

1. 現状の把握

活動初期（2023 年 11 月）にターゲットサイト校だけでなく、周辺の村落の状況の聞き取り調査をマタラム大学学生らに依頼して行った。

2. 現地渡航による確認とコンテンツ選定

現地渡航を 2023 年 12 月に行った。渡航者は挟間理事長、三宅、神田であった。これ以外に福島医大の医学生 3 人と栄養に係るコンテンツの監修のため、管理栄養士 1 名も同行した（団体予算にて支弁済）。まず前年度までの遠隔で行った成果を現地にて確認した。GMC 校、ESN 校それぞれで現地講師の授業のやり方を視察し、装置や照明の有無や教員の労働環境といった特性を確認した。渡航時および渡航後に継続して行っていくコンテンツを選定した。

3. 講師向けマニュアルの編集

「4. 活動の蓄積とモニタリング」と並行して、マニュアルの編集を行った。

4. 活動の蓄積とモニタリング

2023 年 12 月の渡航後、現地主導で継続的に活動を行い、日本から随時モニタリングした。さまざまなコンテンツ内容で、ターゲットサイトそれぞれが体験型学習会を行った。定期的に我々とターゲットサイト、およびカウンターパート間でオンラインミーティングを行い、情報共有に努めた。なお、ESN 校での活動の際には、同時に参加生徒の身長体重を測定し、発達状況の観察も行った。

5. コンテストの実施とフィードバック

活動の仕上げとして、10 月 29 日にハイブリッド形式で健康教育コンテストを実施した（参照先：<https://www.pomk.org/international>）。ESN 校での活動に発達観察を含めたため、その年代を発表者として再定義した。3 人でチームを結成し、ターゲットサイト教員の指導の下、チームごとに異なる内容の発表を行った。発表後に振り返りと今後の活動についての反省点を議論した。

(2) 実施成果:

1. 現状の把握

周辺村落への聞き取り調査などによると、Eco school nusantara (ESN 校) 周辺では相対的に貧困の家庭が多く、子供の低栄養が問題として提起される頻度が多かった、との報告があった。それを受けて、『栄養に関する教育を実施するべきだ、また衛生管理の知識についても合わせて行うのが効果的だろう』という議論がなされた。

2. 現地渡航による確認とコンテンツ選定

「1. 現状の把握」での議論を踏まえ、渡航前からインドネシア側と継続的にミーティングを行い、渡航時の実施コンテンツとして「栄養バランスボードゲーム」「蛍光色素を使った手洗いチェック」「臓器パズル」「タバコの害」を主に行うこととなった。

渡航は12月17日現地着、12月25日現地発のスケジュールで、4校を訪問して教育活動を実施した。ターゲットサイト（GMC校、ESN校）での公演のほか、ターゲットサイト教員を同伴して近隣の公立小学校（プン市第1小、センコール市第4小）でも公演を行った。なお参加教員数は25人（GMC校：6人、ESN校：6人、プン市第1小：5人、センコール市第4小：8人）、参加生徒数は合計180人であった（GMC校：55人、ESN校：30人、プン市第1小：51人、センコール市第4小：44人）。

公立小学校の教員十数人にインタビューをしたところ、『小学校の教員は全体として知識レベルが低い』と認識しており、その原因として『すべての教科を一人で教える必要があること』『給与水準が低く、忙しい』『そのため自己研鑽にあてる時間もない』といったことを挙げていた。また、インドネシア公教育としての問題点として、『建物や物品に乏しい』『おそらく両親が学習習慣を持たなかったため、子供たちも家庭学習の習慣に乏しい』『学習課程は家庭学習があることを前提としているため、教育全体として学習をコントロールするのが難しい』という意見が得られた。この点に関してGMC校の教員から意見聴取したところ、『学習コントロールという意味で同様の問題が、寄宿生と通学生の間にも生じている』とのことだった。こうした点から、今後は家庭学習の推進という観点を取り入れるべきだ、と感じた。

また、現地訪問によってこれまでの成果や実施体制・実施状況を確認した結果、準備したコンテンツを今後継続的に実施する際に大きな支障はないことが確認できた。一方で、コンテンツの内容に改善を要する点もあり（例：『ある食べ物に含まれる栄養素の量を、表から拾い上げる』という作業は子供に退屈さを与え、また量の直感的理解を妨げるため、サイコロや棒グラフのようなアイコンで表示すべき、など）、活動を通じて常にアップデートする必要性も明らかになった。

3. 講師向けマニュアルの編集

インドネシア語で作成されたマニュアル（参照先：<https://www.pomk.org/international>）は、当初予定していたものよりも網羅的で、豊富なコンテンツを含むものとなった。計画通り、「栄養バランス」「手洗いチェック」の章のほか、これまで活動した内容である「肺模型」の章なども設けられており、トータルで40ページ程度の小冊子を作成することができた。

4. 活動の蓄積とモニタリング

ターゲットサイト教員は、それぞれ所属する学校で生徒たちに対して我々が提供した教育コンテンツを実施し、活動経験を蓄積した。実施頻度は月1回以上、参加教員は16人、クラス当たりの生徒数はおよそ平均30人であった。実際に使われた栄養バランスに関するスライド資料を提示する（参照先：<https://www.pomk.org/international>）。なお、教育内容は「栄養バランスボードゲーム」「蛍光色素を使った手洗いチェック」だけでなく、これまでに開発された「肺模型モデル」「腎臓の機能モデル」なども含んでいる。

またカウンターパート主導で、マタラム大学学生とターゲットサイト教員による中央ロンボク県内の地域コミュニティにおける健康教育活動も実施した。これらはのべ11回行われ、うち2回はポシアンドゥ（Posyandu：地域コミュニティが運営する簡易保健施設、今回はSkendang村とLoang Landak村で行った）と協力して実施することができた。

これらを総計すると、およそのべ3000人程度に対して健康教育活動を行ったことになる。モニタリングを通じて、ターゲットサイト教員が話す際の「慣れ具合」から、経験が能力向上につながって

いることが実感できた。

5. コンテストの実施とフィードバック

参加チームは合計 19 チーム（うち GMC 校 15 チーム、ESN 校 4 チーム）、発表者の年齢は 10 歳から 12 歳であった。発表内容は今年のメインテーマである栄養バランスの他、自分たちが興味をもった臓器の機能やタバコの害などであった。発表の内容や完成度はチームごとに違いがあったが、生徒たちはおおむね楽しく発表しているようだった。この年齢層だと発表における指導者の役割がより重要になるため、指導者のやる気や健康教育に対する理解度が発表の完成度に大きな影響を与えたようだった。特に ESN 校のチームはチームごとの差が顕著で、GMC 校からのノウハウの移転が起きたことは確認できたが、担当教員のモチベーションに違いがあったのかもしれない。

（３）得られた教訓など：

インドネシア統計局のデータによると、近年西ヌサトゥンガラ州での栄養状態は急速に改善しているように見えるのだが、村落でのインタビュー等ではいまだに栄養教育に関する要望が多かった。もちろん体格が小さいことが差別に結び付きやすい（だから改善したい）、などの要因はあるだろうが、本質的にこうした村落では栄養状態が改善していないのかもしれない、と思い至った。そのため、生徒の体格を継続的に計測する必要性が出てきた。結果はまだ明確になっていないが、このように単なる統計数字だけではわからない「一様に発展してきているのか、それともモザイク状なのか」について考察を深めたうえで活動に反映していきたいと考えている。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

報告期間終了後も継続して現地での活動・フォローアップしていく方針に変わりはないが、大きく 2 つの視点から活動する。一つ目は「クオリティの維持」である。これまで数年間の活動を通じて、徐々に現地での自走度が高まってきており、これまでと同等の活動であれば強力なサポートは必ずしも必要ではなくなってきた。一方で、こうした活動は人の入れ替わりが多く、ともすれば活動が実態を伴わなくなり、形骸化しかねない。活動のクオリティを維持するためには定期的なチェックが必要である。この点は労力そのものは大きくないものの、現地でのチェック体制をいかに構築できるかがポイントとなる。そのため、カウンターパートであるマタラム大学の『コミュニティに対するアウトリーチ活動』と協力体制を構築することができたため、これを活用していくこととする。特に、授業のクオリティに直結する「参加教員のモチベーション維持・向上・底上げ」をどうするのか、が課題と言えよう（現在のところ、本の出版や日本への視察などを検討している）。

もう一つの視点は「パートナーシップの拡大」である。今回の活動においては、これまでよりも地域コミュニティとのかかわりを増やしてきた。地域コミュニティが運営する保健施設ポシアンドウとの協力だけでなく、コンテンツ作成時でもプスキスマス（保健所）が提供する『手洗い歌』を採用した。このように、健康教育の拡大にあたって地域のインフラを効率的に利用できればと考えている。今回作成した冊子の活用方法もポイントになるだろう。学校教育だけでなく、家庭教育、社会教育への波及を指向することで、裨益者の総数を増やしていきたい。こうした観点から、現在草の根技術協力事業へ申請中である。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

『栄養バランスボードゲーム』は三大栄養素のバランスを体感するのが目的のゲームで、平らな机や床にセットして遊ぶために開発した。が、ESN 校の床の凹凸があまりに激しく、バランスをとる以前に勝手に倒れてしまうことがあった。これはその後改善したため笑い話となったが、オンラインだけでは現地の環境を把握しきれないという良い例になったと思う。

(2) 活動の写真



(ESN 校での活動後の集合写真。この日 ESN 校では、手洗い、栄養バランス、タバコの害、からだパズルの 4 項目を行った。写真前列左側にパズルの完成したものが掲げられている)



(歌を歌いながら手洗いのやり方を学んでいるところ)



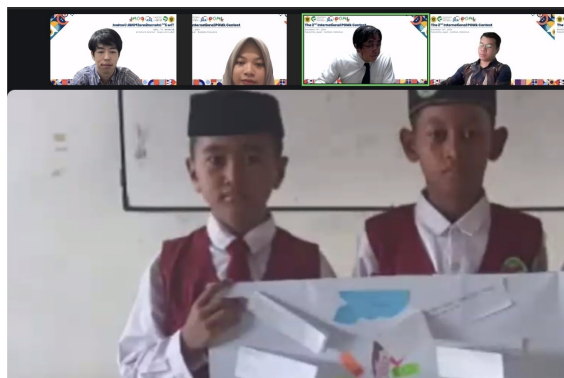
(ハンドソープを使って正しい手洗いの実践)



（蛍光パウダーとブラックライトを使って、手の洗い残しがないかどうかをチェック）



（適切なメニューを選んで栄養バランスの取れた献立を作ることができれば、栄養バランスボードは倒れずに自立することができる）



（ハイブリッド形式で開催されたコンテスト。現地（GMC 校、ESN 校）で臓器の機能についてプレゼンする小学生チームの様子。画面上に日本側とインドネシア側カウンターパート、一般参加者が映し出されている）

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

今回の基金活用事業は３回目となるが、継続して採用していただけたことで、徐々に活動内容を深化させることができた。活動の継続は極めて重要な点で、（活動内容の発展だけでなく）１年目（2019年）の活動では授業を受ける側だった中高生が、今やマタラム大学学生として教える側の活動に参加するまでに成長した。インドネシア側だけでなく日本側で関与してきた人材も成長することができ、今年の活動では専門職人材として活躍している。また、予定より活動開始が遅延したり、内容の変更に対して柔軟なところは、JICA が関与する事業ならではのメリットだと感じている。